兵庫県
地域遺産活用指針

～地域の宝を五国で活かす～

２０１９年5月

兵庫県

Ⅰ	はじめに	
1	今なぜ地域遺産か・・	P1
2	指針の位置づけと目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P2
3	地域遺産とは・・・	P2
Ⅱ	ひょうごの地域遺産の特色、可能性	P3
Ⅲ	取組みの課題と方向性	
1	取組みの課題・・・	P7
2	取組みの方向性・・	P7
Ⅳ	重視すべき視点	P9
Ⅴ	地域遺産を活かす地域づくりに向けて	P10
1	地域遺産を発見する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P11
2	ストーリーを描く・・	P13
3	地域遺産の価値を磨く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P15
4	地域遺産の価値を発信する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P17
5	地域遺産を五国（広域）で活かす・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P20
6	地域遺産を次代につなぐ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P22
	関係用語集	P25
	指針策定の経緯	P29

Ⅰ はじめに

１. 今なぜ地域遺産か～高まるコミュニティのリスク、歴史資源への期待～

・　兵庫県は、北は日本海、南は瀬戸内海に面し、淡路島を介して太平洋を臨む広大な県土を持ち、美しい自然や多様な風土に恵まれ、そこに豊かな歴史、文化、厚みのある産業を多くの先人たちが築いてきた。

・　これら自然や人の営みの所産は、自然景観や有形・無形の文化財など、各地に様々な形で存在しており、人々の生活に深く関わるとともに、地域の個性やアイデンティティとなっている。

・　しかし、近年、多自然地域では少子高齢化や人口減少の進展等により、小規模集落が増加し、人口の流動性の高い都市部ではコミュニティへの帰属意識が希薄化するなど、コミュニティの弱体化が指摘されている。これにより、コミュニティが守ってきた多様な歴史や文化を伝える様々なモノが散逸の危機にある。

・　こうした中、文化庁では、文化財をいかに活用しながら後の世代に継承していくかという課題意識のもと考え方を整理し、文化財保護法の改正が行われた。
　文化庁が平成 27 年度に認定を開始した「日本遺産」は、これらの流れの中で文化財を観光や地域振興に積極的に活用しようとするものである。

・　今危機にあるコミュニティの維持・発展の基本となるのは、人々のその地域に住み続けたい、何度も訪れたいという思いである。そしてその「鍵」となるのは、そこに住まう人々自身が「地域のアイデンティティ」への確たる思いを有しているかどうかであり、その確立には、その土地にしかない歴史文化遺産、自然遺産を「地域遺産」として捉え直し、地域づくりの資源として活かすことが有効であると考えられる。この認識のもと、今回この指針の検討を行った。

〔日本遺産とは〕
　地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage)」として文化庁が認定するもの。
　既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在するストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、「面」として活用・発信することで、地域活性化を図ることを目的としている。

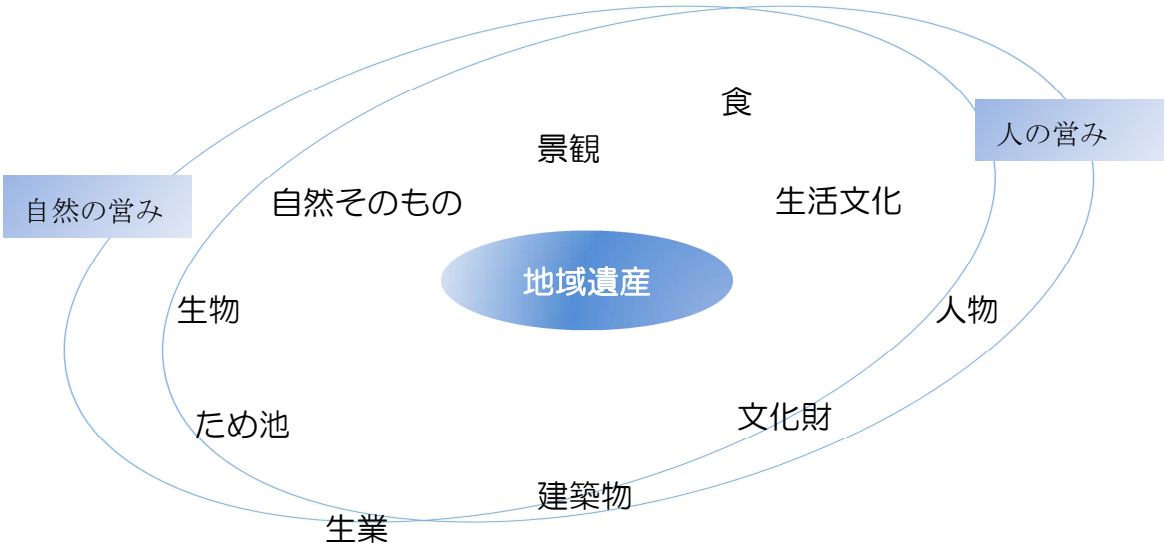
２ 指針の位置づけと目的～地域遺産を活かす新たなコミュニティづくりにむけて

・　この指針は、魅力あるコミュニティの維持・発展に向け、特に歴史的資源を活かした地域アイデンティティの確立に向けた地域づくり活動をさらに促進することを目的として策定する。

・　地域団体や個人、事業者、市町等地域の様々な主体が協働・連携して、取組を進めるに際し、参照・活用できるガイドラインとなることを想定し、「地域をなんとかしたいがやり方が分からない人」「既に地域遺産を使って地域づくりに取り組んでいる人」にとって不足するものを解決し、活動を前に進めるサポートとなる内容を盛り込んでいる。

３　地域遺産とは～地域の個性の源泉、有形・無形は問わない～

・　「遺産」は過去から継承し、次代に引き継いでいくものであり、その過程で「地域」の個性の源泉となっていく。この指針においては、「過去からの自然や人の営みの所産が、文化や自然など様々な分野において、有形・無形の様々な形態で、今に継承されているもの」を「地域遺産」という。



その土地ならではの地形・地質、気候
その土地ならではの生態・植生
その土地ならではの生活・文化・産業

地域遺産はオンリーワン～
発見や感動につながる宝物
として次代に引き継がれる

Ⅱ ひょうごの地域遺産の特色、可能性

・　兵庫県の特性は、個性豊かな旧五国（摂津、播磨、但馬、丹波、淡路）から成る多様性、他に類を見ない広域性であり、このため、本県には幅広い年代、分野、テーマの地域遺産が存在している。

【個性豊かな五国の地域遺産】

1　いち早く海外に開かれ、国際性豊かで先導的な文化を有する摂津
2　肥沃な播磨平野を有し、播磨風土記の舞台であり、名城が数多く残る播磨
3　渡来人の伝説と古墳文化が残り、多様な地域遺産と豊かな自然に恵まれた但馬
4　篠山・柏原をはじめ、歴史的な町並みが残り、伝統工芸の特産品に恵まれた丹波
5　国生み神話ゆかりの地、御食国として多くの食材に恵まれた淡路

【多彩なストーリーを生み出す素材群】

・　古代から政治経済の中枢に近接し、東西南北の交通の結節点であったことから歴史上の有名な事件などの舞台となることが多く、日本の発展に重要な位置を占めてきた。豊臣秀吉による中国攻めや、日本初の外交交渉と言われる神戸事件など時代のターニングポイントとなる出来事の舞台となり、また、ＮＨＫ大河ドラマ「平清盛」（2012 年）や「軍師官兵衛」（2014 年）に代表されるようにドラマに取り上げられることも多く、これらにちなんだ遺跡や碑が県内各地に残されている。

・　兵庫県は瀬戸内海と日本海に面し、淡路島を介して太平洋を臨んでいる。また、中国山地の急峻な山々が連なる北部から、大河が流れ農作に適した豊かな平野が広がる南部、また淡路島を初めとする島しょ部等、地形・地質と気候の変化に富んでおり、「日本の縮図」と言われている。例えば、但馬では日本列島が大陸の一部であった時代から日本海が形成され現在に至るまでの様々な地質が見られるユネスコ世界ジオパークに認定されている「山陰海岸ジオパーク」がある。

・　日本の原風景が様々な形で各地に残っており、豊かな自然と都市とが近接し、自然が暮らしに密接に関わってきた。大都市圏に近接したレジャースポットとして開発されてきた都市山・六甲や、生物多様性の宝庫である北摂地域の里山、日本一の数を有するため池、コウノトリの野生復帰の取組などがその代表例であり、「人と自然の共生」を様々な形で学ぶことが出来る。

・　気候や地理的条件が地域によって大きく異なるため、地域単位で、食や住まい、祭りなど独自性の高い生活文化が伝わっている。丹波のデカンショ節や淡路の人形浄瑠璃など独特の文化・伝統芸能とともに、開港により欧米の文化に影響を受けた神戸の洋食文化、播磨平野の大豆や小麦、米を用いた醤油、そうめん、日本酒づくり、日本海の海の幸、全国的なブランドである丹波の黒豆、「御食国」淡路の多様な食材など、各地域に特色有る食文化が根付いている。

・　但馬や播磨に多く残る古墳時代の渡来人の足跡、大輪田泊を中心とした国際貿易、朝鮮通信使ゆかりの地、そして、ヴォーリーズ建築群に代表される「阪神間モダニズム」まで、世界への窓口として古くから海外とのかかわりの中で独自性を育み、多文化共生の考え方が定着し、外国人を多く受け入れてきた。

・　このように、兵庫の地域遺産は、地域の特色として多様であるだけでなく、時代やテーマが重層的であることが特徴である。このため、世界遺産姫路城のように全国的な知名度を誇る遺産だけでなく、遺産の種類が多種多様で広く存在している。これらの中には、現在が知名度は高くないが、適切にその価値を読み解き、存在を広く知られることにより地域の魅力づくりの起爆剤となり得るものも含まれる。

（テーマ別に整理した、ストーリーの素材としての地域遺産）（主なもの）

	摂津	播磨	但馬	丹波	淡路
ふるさとへの思い・祈り、風情	農村歌舞伎 だんじり祭	播州の秋祭り 岩座神の棚田	百手の儀式 麒麟獅子舞	デカンショ節	人形浄瑠璃 農村歌舞伎
歴史をとどめる町並み、名建築	北野異人館街 阪神間モダニズムの名建築	一乗寺、朝光寺、鶴林寺、浄土寺等の国宝 平福の町並み 龍野の町並み	出石の町並み 城崎の町並み 大屋町大杉の町並み	篠山城下町 福住宿場町 柏原八幡神社	洲本城 由良要塞
豊かさをもたらした技術、産業	多田銀銅山 湊川隧道 淡山疏水	たたら製鉄跡 東条川疏水 淡河川山田川疏水 塩の国	生野銀山、明延鉱山、神子畑選鉱場	丹波焼	五斗長垣遺跡、舟木遺跡
受け継がれてきた神話	五色塚古墳	五百羅漢 石の宝殿	出石神社（アメノヒボコ伝説）	豊林寺、櫛岩窓神社	松帆銅鐸 伊弉諾神宮
地球の営み、自然の奇跡	六甲山系 蓬莱峡	宍粟の森林	玄武洞など山陰海岸ジオパーク	篠山層群と丹波竜	鳴門の渦潮 野島断層 鞘形褶曲地層
人と自然の共生	北摂里山	ため池群 瀬戸内海	コウノトリ	丹波の里山	棚田の畦

デカンショ節（篠山市）
江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節には歌い継がれる過程で、ふるさとへの思いや風情、名所が歌詞に織り込まれてきた。

鳴門海峡の渦潮（南あわじ市）
鳴門海峡の渦潮は、潮汐と地形が生み出した奇跡の自然現象であり、学術的な解明が待たれる。

多田銀銅山（猪名川町）
調査活動の結果、「江戸から明治に至るまでの鉱山のあり方や産業技術史を考える上で重要」として国史跡とされた。

玄武洞（豊岡市）
160 万年前に起った火山活動によって、山頂から流れ出したマグマが冷えて固まる時に規則正しいきれいな割れ目を作りだしたもので、数知れない六角形の玄武岩が積み上げられて不思議な美しさを見せる。

宿場町・平福（佐用町）
兵庫の西端、宿場町として栄えた約 400 年前からの町並みが 1.2km に渡って今に残る平福。

岩座神の棚田（多可町）
日本の原風景といえる棚田の中でも、鎌倉時代に作られた石垣づくりでその美しさは西日本一とも評価されている。

石の宝殿及び竜山石採石遺跡（高砂市）
宝殿山山腹の生石神社に神体として祭られている巨石。幅 6.4m、高さ 5.7m、奥行き 7.2m。重さは推定 500 トンを越える。誰がいつ何の目的で作ったものであるのかは、不明。

兵庫の地域遺産

・ストーリーの素材、登場人物の宝庫
・心に残る風景、シーンの宝庫
・学びの題材の宝庫

Ⅲ　取組みの課題と方向性

１．取組みの課題～「何もない」「何もしない」から進むために～

・　地域遺産を活用した魅力ある地域づくりの活動を始め、進めるためには、次の３点の意識を地域の人々が持つことが必要である。

① 隠れているものに気付かなければ「素材」にもならない

その土地の歴史や風土を反映した地域遺産は各地域に存在するが、地域住民にとっては「あたり前の風景」でしかない。隠れた地域遺産に気付かなければ、それを活かした取組みにつなげることはできない。

② たくさんある」だけでは「素材」のまま

存在に気付いた地域遺産の価値や特徴をできるだけ明確にする過程で、何に、どのように活かせるか活用方策が見えてくる。

③ 多くの人に分かりやすく伝える工夫が必要

地域遺産の価値を、幅広い層の人々に知って貰うことが重要。そのためには、遺産の価値をそのまま伝えるのでは無く、分かりやすく伝える工夫が必要となる。

２．取組みの方向性～「ストーリー化」で多くの人に届ける～

・分かりやすく伝える工夫として、有効な手段が「ストーリー化」である。単なる史実や学術的価値についての断片的な情報は、そのまま読むだけではなかなか頭に入ってこない。なぜそうなったか、その時どんな人物がどんな思いを持ったかなど、登場人物やエピソードを加え、物語化することで、受け手は自分たちの思考、感情、経験を当てはめながら、すんなりと実感をもって理解することができる。これが「ストーリー化」である。ストーリー化にあたって必要なのは次の３点である。

① ストーリーの素材を発見する

地域の場所やモノなどを調べ、整理する中で、ストーリーの中核となる人物や歴史のターニングポイントとの関わりが深い、メインとなる地域遺産を発見する。また、ストーリーに深みを与えるような背景エピソードを調べる。「何もない」と思うのではなく、歴史への好奇心を持ってまず調べてみることが重要である。

② 見つけた素材をつなげる

素材ひとつひとつを整理し、複数の地域遺産同士を繋げていく。テーマや時間

軸、季節など、様々な視点から遺産同士の繋がりを見つけ、ストーリーを構築していく。

③ ストーリーを地域内外に発信する

個別の地域遺産を単体で発信するのではなく、ストーリーとして発信し、地域遺産がそのストーリーの中で果たす役割を強調する。

〔個別の課題と方向性〕

活動する上でのネックや課題となっていることをカテゴリごとに整理し、それに対する方向性をまとめた。

	課題		方向性
意識	・「我が町は何もないところ」 ・「遺産」と自分は関係ない ・何をしていいかわからない	▶	・当たり前を見直す ・逆転の発想 ・知ることから始まる
情報	・基礎情報がない ・情報が分野ごと、市町ごと ・大事な情報が分からない	▶	・リストの作成と共有、活用 ・共通項を見つけて地域間連携 ・遺産の特徴を知る
人材	・活動の担い手がいない ・市町、地域に専門家がいない ・役割分担、連携ができない	▶	・関わり方は多様 ・助っ人は地域にいる ・地域の外に目を向ける
発信	・ストーリーができない ・伝え方が分からない ・ターゲットが分からない	▶	・オンリーワンの発見 ・コーディネーターを見つける ・選択と集中を意識する
活動費用	・遺産で儲けていいのか不安 ・商品化の手段が分からない ・適切な対価が分からない	▶	・活用は保存につながる ・パッケージ化を学ぶ ・マーケティングを学ぶ
手法	・遺産を使ってどんな地域にしたいか、分からない ・何から始めるか分からない	▶	・議論の場をつくる ・足りないものを見極める ・得意分野を活かす

Ⅳ　重視すべき視点

１　地域遺産を地域づくりの資源の中核として活用する

地域遺産は人間の暮らしの様々なシーンに密接に関わっており、観光や教育、まちづくり、経済活動など様々な観点から見直すことが、新しい価値創造につながる。

２　活用と継承に向けて地域遺産の発見と価値の共有を進める

存在と価値を知られなければ地域遺産は放置されてしまう。次代に引き継ぐためには、地域遺産の持つ本来の価値を知り、それにふさわしい現代における活かし方を見いだす必要がある。

３　様々な主体の連携で地域遺産のストーリー化に取組む

地域遺産の背後にあるストーリーを知り、また複数の地域遺産のストーリー化を行うことで、地域遺産と人々の関わりが理解しやすくなり、認識されにくい小さな地域遺産の再発見もできる。

４　ターゲットに応じたパッケージ化で宝の価値を戦略的に発信する

地域遺産の発信には、対象に応じたマーケティングと、ストーリーを追体験しながら、商品やサービスを消費できるパッケージとしてのプロモーションが重要である。

５　文化と自然のつながりでストーリーと体験の魅力を高める

自然と文化の垣根を越え共通項を探すことで、地域遺産が広域でつながるストーリーができる。また、地域遺産やそれを活用する専門人材の情報は広域（県域レベル）で蓄積すべきである。

６　地域に住まう人自身が中心となって資源をマネジメントする

目標設定や計画づくり、中核組織の運営など、地域遺産を資源としてマネージメントする中心にあるのは、地域遺産の存在に誇りを持つ地域の人自身である。地域の人が中心となり、地域外からの人材、資金やノウハウ、サービスを上手に活用することが重要である。

Ⅴ　地域遺産を活かす地域づくりに向けて

重要なのは目的の共有～地域遺産を活かし、どんな地域をつくりたいのか～

・　まずは、何を目的として地域遺産を活用しようとするのか、地域で議論し、目的を共有することが需要である。

活用の目的

・大切な地域遺産を次世代に引き継ぎたい
・ＵＪＩターンで移住者が増えて欲しい
・自分の地域に誇りを持って住み続けたい
・観光客を呼び込んで地域の経済を潤わせたい　　・・・等

地域遺産を活かす６つのステップ

・　目的や地域の状況によって、必要な取組みは異なる。ここでは、目的に応じて必要となる取組みを、共通する内容で束ね、６つのステップに整理したが、全てのステップを順番に踏むことを推奨するものではない。必要なステップを選択して取組むことができる。

・　それぞれのステップについて、次頁以降に、取組みのポイント、手法、参考となる事例を記載している。

１　地域遺産を発見する

２　ストーリーを描く

３　地域遺産の価値を磨く

４　地域遺産の価値を発信する

５　地域遺産を五国（広域）で活かす

６　地域遺産を次代につなぐ

１　地域遺産を発見する

〔Point〕

□地域にある素材を「活かす」視点で見いだす。「活かす」とは、観光振興や地域おこしのためだけでなく、地域を理解し、地域を魅力あるものにするための意味や価値として幅広く捉える。

□学術的な裏付けを確認しておくことで、素材と地域との歴史を明確に説明することができる。それが地域の「オンリーワン」「ナンバーワン」のもととなる。

〔手　法〕

①住んでいる地域、身近な生活の場を見直す

・珍しい地名や地形、昔話や伝説など地域に伝わる謎、古地図や写真、生活用具等暮らしの中の情報を地域で持ちより、その成立ちや由来を調べる

・地域の偉人や歴史上の人物など、「人」に着目してエピソードなどを発見する

・祭りや踊り、伝統工芸、また、伝統技術や地域独自の料理法など無形のものの背景を見直す

・閉鎖になった校舎や工場、古民家など一見価値が内容に見えるものの建築物や景観上の価値を見直す

・印象的な「音」「風景」は、地域外の人の口コミやＳＮＳなどから発見する

②見出した素材の歴史的意義を知る

・自治体史や地域史、データベース・アーカイブから調べる

・専門家のサポートを受けると、広い視野や新たな学術的価値からの評価が可能になる

・素材を分野や時代などに区分し、さらにキーワード(人物、事件等)やカテゴリ(芸術、食等)で整理して、カタログ化を進める。

③対象地域を広げて幅広く掘り起こす

・歴史的または地形的に似た背景を持った地域遺産を市町域を超えて探す

・現在の基礎自治体単位にこだわらず、明治や昭和期の合併前の姿を探す

・大規模自然災害が頻発する中、地域遺産がどのようなリスクに晒されているか整理する

参考事例

〔事例〕「オンパク」手法（「久留米まち旅博覧会」（福岡県久留米市）など）

・普段から慣れ親しんだ地域資源を紹介する小規模体験交流ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを市民が企画。

・小規模の体験交流型プログラムやイベントを集め、短期間にイベント的に開催し、交流人口の拡大だけでなく、実施主体の地域住民にとってもそれまで見えなかった地域資源の再発見にも繋がる。

・別府八湯温泉泊覧会（オンパク）が 2001 年に実施したのが始まり。現在この手法を取り入れた取組みが日本各地に広がり、サミットも行われている。

・「久留米まち旅博覧会」では地域遺産の発掘のキーワードの一つが「今も残る江戸～明治時代の『痕跡』を探す」であり、案内人の一人は地元紙の記者である。

▲「久留米まち旅博覧会」による街歩きの様子。

〔事例〕「フットパス」で地域を再発見

・「フットパス」とは、地域の人たちが大勢参加してフットパス（地域のありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径【Path】）をつくっていくという活動で、単にウォーキングの振興や健康づくりのためだけでなく、地域の歴史・伝統・文化などの資源を再発見することにつながり、地域おこしに大変有効だと考えられている。

・東京都町田市で行われているフットパスでは、NPO 法人「みどりのゆび」を中心に、旧街道を歴史を勉強しながら歩き、その中で看板整備等の小さな努力を積み重ねていくうちに、周辺の人々にも活動の輪が広がり、地域の人達が自分たちの地域の価値に気づき、誇りを復活させ、一丸となって地域おこしに取組むようになった。

▲東京都町田市のフットパスの例

２　ストーリーを描く

〔Point〕

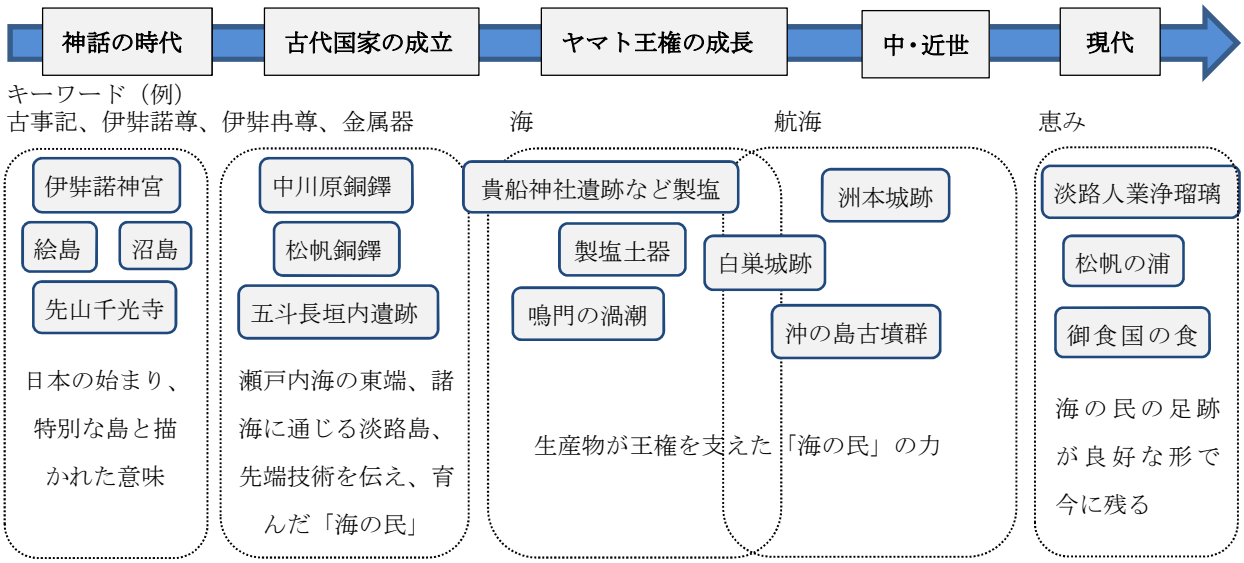
□バラバラに見える地域遺産は、地域の様々な情報（言い伝え、歴史書、学術調査の知見、観光情報など）をもとに整理していけば、一つの流れ（ストーリー）として再構成できる

□地域遺産を個別に説明するよりも、大きなストーリーの中で各地域遺産が果たす役割を説明することで、より魅力が伝わりやすくなる

〔手　法〕

①同じキーワードで関連づけられる複数の地域遺産を、「テーマ」と「時間軸」を意識して、地域遺産の歴史や自然科学的な背景の「全体」と「ポイント」が理解できるようにつなぐ。

〔事例〕「国生みの島・淡路」のストーリーの素材と全体構成



②重要な「ポイント」を集約しながら、「全体ストーリー」を「テーマ」として明確に浮かび上がらせる。

〔事例〕「国生みの島・淡路」のストーリーのポイント

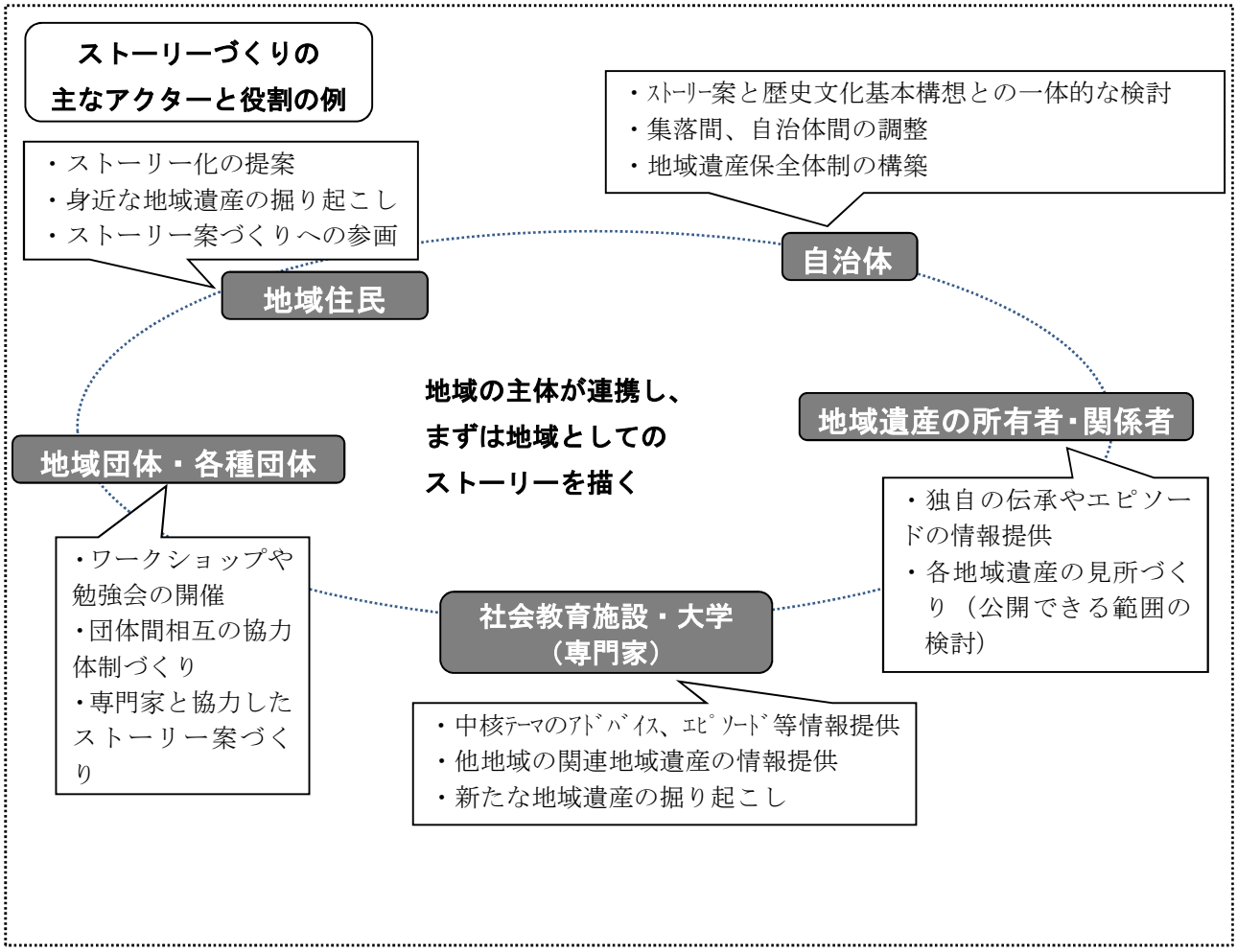
・「古事記」に「特別な島」として描かれたという事実だけがテーマではない
・淡路島の地政学的価値が古代国家形成期に重要な役割を果たさせた
・特別な位置づけを生んだ「海人」の営みにクローズアップ
・島に残る貴重な遺跡や多様な文化遺産が歴史を振り返る意義を今に伝える

③ストーリーを伝える「ターゲット」、ストーリーの舞台となる「スポット」を想起しながら、サブストーリーを抽出し、全体のストーリーの厚みを増す。

〔事例〕「ストーリー」と「ターゲット」

伊弉諾尊・伊弉冉尊が天沼矛で下界をかき回し、その渦巻く様子は･･･「鳴門の渦潮」	⇒	**美しい景観を求める人**
国宝級の資料と言われる「松帆銅鐸」の謎の解明はこれから。	⇒	**歴史ファン 遺跡ファン**
朝廷儀式「月次祭」で使うのは「淡路の塩」と定められ、塩以外にも多くの海の幸が天皇の食膳に上った	⇒	**「御食国」のグルメファン**

④専門家や地域外の人の視点を活かせるよう、多様な主体と共同でつくる



３　地域遺産の価値を磨く

〔Point〕

□地域の将来像にどう生かすことができるか、ストーリーやそれを構成する地域遺産を多角的に「理解」「評価」する。

□その地域遺産が本来有している様々な価値を見逃さないよう、異なる視点、立場から、「何を残したいか」「何を伝えたいか」のポイントを明確にする。

□「ここにしかない」「ここが一番」はもちろんのこと、「ここが違う」がポイントになる。

□外部からの「価値付け」の取得はその目的と必要性を議論し、取り組む。「格付け」が目的になっては意味がない。どの価値付けを選択するかも重要。

〔手　法〕

①遺産の価値を顕在化させる

・ストーリーには地域の特色が凝縮されている。その特色を生かした地域の魅力づくりの方向性を議論し、将来像を地域内で共有する。

例）：地域の将来像

観光客を多く取り込みたい	保全を優先し、風格のあるまちにしたい	定住者を少しでも獲得したい

・生かし方を念頭において、「学術的な希少性」に加え、「題材の面白さ」「インパクト」「見た目」「生活との関わり」「四季それぞれの美しさ」など、特色をより明確に示す。その際、伝わりやすさも重要視する

②他地域との差別化を図る

・どこが他の地域と違うのか、地域住民自身が理解を深める。

・「個性化」「唯一化」をめざし、一言で表現できる特徴をつかむ

・地域外の専門家の助言を得る

・ストーリーを構成する地域遺産から核となりうるものを抽出する

・未だ残る謎を探求する調査研究の継続実施や、ストーリーの追体験ができるプログラムの企画等により、人々の興味を捉え続ける発展性を追求する

③遺産の価値と目的を共有する

・世界遺産も身近な地域の宝そのものの価値に本質的な違いはない

・保存、活用の広域的な枠組み強化に必要な場合、外部からの認定を目指すことも一手法

例）：

世界遺産	世界ジオパーク	世界農業遺産
人類全体のための遺産を損傷，破壊等の脅威から保護する	地球活動の所産を保護しながら、教育や観光･地域振興に活かす	伝統的な農法や土地利用、農村文化･景観の一体的維持保全と継承

参考事例

〔事例〕“世界遺産”ではなく“世界ジオパーク”を目指した「山陰海岸」

国立公園指定

多様性に富んだ海岸「景観」が評価された

世界遺産登録検討

地球レベルで見たときにスケールが小さい、
海岸は規制エリアが限定的となる点が課題

地域内で価値を共有し、磨く

山陰海岸の本質的な価値は？
⇒「2500 万年前の日本列島誕生」というストーリーの独自性
漁場や温泉、棚田など地形との密接な関わりから育まれた独自の生活文化

地域の将来像を議論
・山陰地方は他地域と比較して少子高齢化の進行、地域の活力低下が顕著
・地域遺産を核に、資源を活用し自然と共生する新たな産業を創出したい

山や川等の景観も、その成立ちや人との関わりを知れば違った景色に見える

付加価値

体験してもらうために必要なことは？
・新しいツーリズムメニューやガイド
・価値の明確化、普及と学識者ﾈｯﾄﾜｰｸの構築
・地域における保全、教育

世界ジオパークへの加盟

“守る”だけでなく”活かす”に重点を置いたネットワーク型の価値付け

～認められた価値を磨くには～

「世界遺産」や「日本遺産」などの価値付けがゴールになっていないか？

「価値付け」の意義とは何なのか？

意識付け　保全の法的担保　ランク付け
外部への公開　将来への展望　地域活性化

意義を理解し、認定や登録の後もそれに沿った取組みを続けることが必要
（ジオパークの場合、取り消しもあり得る）

日本遺産の課題

・構成文化財はストーリーの中で生かし続けなければ埋没してしまうものが多い。
・文化庁が 2020 年までに認定する 100 程度のストーリー全てがライバルとなる。

優良事例から見る活かすためのポイント

- 昔の価値を今に活かすコンセプト
- 観光プランへの位置づけ
- 民間からのリーダー選定
- ボトムアップの協議会体制
- ストーリーと連動したコース提案
- 学校を通じた啓蒙活動

「日本遺産フォローアップ委員会報告」（文化庁, H29）

４　地域遺産の価値を発信する

〔Point〕

□『その地域遺産を知ってもらう』ための説明から、ストーリーを活かし、『この土地だからこそ生まれた地域遺産の価値を知ってもらう』ための説明へと深化させる。

□ 「説明力の高い地域遺産」と「伝え方の工夫が必要な地域遺産」を見極め、「視覚」や「聴覚」への訴えかけなど、ＰＲ全体をデザインする人材の育成・確保**～デザイナー～**

□ 受け入れのキャパシティーを考慮したプラットフォーム組織の構築と様々なターゲットに応じた対応ができるガイド育成を進める人材の育成・確保**～コーディネーター～**

□ 様々な主体を巻き込み、地域遺産の価値にふさわしい地域づくりを計画的に進め、地域そのもののブランド力を高めていく人材育成・確保**～プロデューサー～**

□ ストーリーを追体験しながらグルメや温泉、スポーツ、買い物など消費につながるパッケージ化を行い、宿泊や食事・休憩場所など地道な環境整備を進める。

〔手　法〕

①素材を生かすデザインとパッケージ化を行う

・ 来訪者に何を知って貰いたいか、何を楽しんで貰いたいか（商品、サービス）、事業者等の知恵も生かし、地域遺産を生かしたもてなしの方法を考える

・地域遺産と生活との関わりから素材の生かし方を考える

・イベントや交流の場として様々な歴史的空間を生かす

・地域の歴史文化の特徴としての「テーマ」を見出し、カタログ化から見えてくる地域の売りを鮮明にする

②商品化とプロモーションに取組む

・美しく、魅力ある場の空気を切り出すなど、視覚（映像、画像）で惹きつける

・本物やストーリーが体験できるツアーやモデルルートなど、プログラムメニューとしての打ち出しを検討する

・インバウンドにはＡＬＴなど在住外国人（ネイティブ）自身の言葉での発信が有効

・双方向性や投稿のターゲットなど、ＳＮＳの種類や特性を理解し、目的に合わせて活用する。

・プロモーションの対象とエリアを明確にする

参考事例

〔事例〕軍港都市をﾃｰﾏとした観光地化を通じた地域再生（神奈川県横須賀市）

・軍港都市という暗いイメージ払拭のため、海軍カレー等既存の観光資源を背景に観光クルーズ「軍港めぐり」や「横須賀ネイビーバーガー」の販売など軍港をﾃｰﾏにした観光コンテンツのパッケージ化による地域活性化を実施。

・軍港めぐり（■）の効果により従来のクルーズ航路の乗客数（◆）も増加しており、地域への集客の増加に繋がっている。（下図）

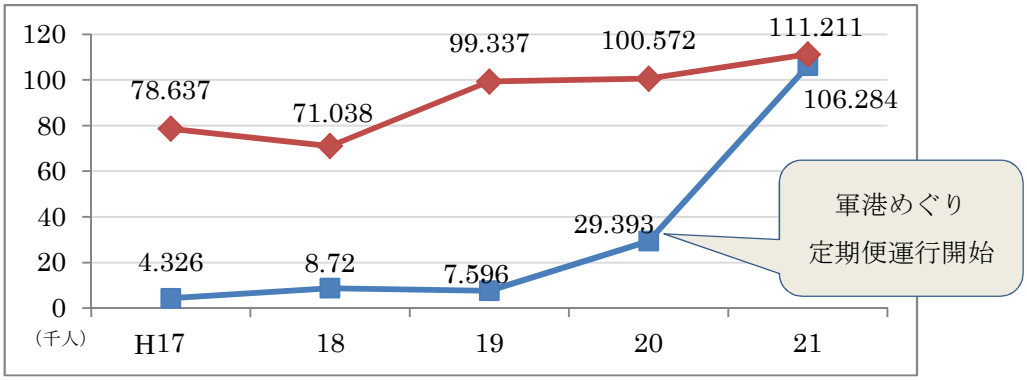


図　横須賀市２航路の乗客数推移

〔事例〕「北斎」を活かしたまちづくり（長野県小布施町）

・S40 年代は人口１万人。観光地としては無名。きっかけは S50 年代の「北斎館」の建設

・交易地として栄え、豪農・豪商が文化墨客を招き、葛飾北斎が晩年何度も訪れた町。

・北斎が天井画を描いた祭り屋台と肉筆画が中核となる地域遺産。

・昭和 56 年から５年にわたり、民間主導の「景観修景事業」を展開。町並みの単なる保存ではなく、生活・生産・商い・観光など機能の複合を実現するため、建築家の宮本忠長氏をコーディネーターとし、企業（小布施堂）・金融機関・行政・住民の話し合いによる配置変換や遊歩道の整備、古風な町並みの雰囲気づくりを実施。

・住民は町に伝わる「縁側文化」「お庭ごめん」のもとオープンガーデンに参画。

・栗の産地として有名であり、「ここでしか食べられないもの」として和栗モンブランの開発、レストラン事業の展開

・第三セクター「株式会社 ア・ラ・小布施」を H5 に設立、ガイドセンター・イベント・飲食・売店・宿泊施設・賃貸業及び管理を実施。町 100 万円、住民出資 33 人・2 団体合計 1650 万円でスタート。

・「栗と北斎と花のまち」がテーマ。年間観光客 110 万人を実現。

〔事例〕「宿場街　福住」（篠山市）

・宿場町と農村集落という二つの歴史的町並みがひとつの街道に沿って連続する全国的にも珍しい伝統的建造物群保存地区（伝建地区）。まちなみ保存会が発足し、町並み保存活動に地域主体で取り組むほか、NPO による古民家再生ボランティアも行われている。

・ＮＰＯや一般社団法人、事業者等様々な主体により、町並み散策、城下町観光、ぼたん鍋の食、陶芸体験などの工芸、古民家宿泊、お試し移住など、様々な歴史資源の組み合わせにより、本物体験を提供することで、滞在型ﾂｰﾘｽﾞﾑや移住促進の取組みがなされている。ＮＰＯなどではクラウドファンディングの仕組みも積極的に活用している。

〔事例〕「陰陽師の里　江川」（佐用町）

・安倍晴明と芦屋道満がこの地で対決し、その両方の塚が存在する、また陰陽道に則って形づくられた地域。11 集落からなる地域づくり協議会が中心となり、写真展やｺｽﾌﾟﾚｲﾍﾞﾝﾄ七夕行列・護摩焚き、星空の美しさを活かしたｲﾍﾞﾝﾄの開催により「陰陽師の里」としてのﾌﾞﾗﾝﾄﾞ化を目指している。

・地域の議論では、高齢化が進む中で地域内の住民だけで地域を活性化していくことには無理があるとして、地域外から人を呼び込むためにコアな歴史ファンに着目した。住民が楽しむこと、結果として地域ににぎわいが生まれることを重視した取組み。

〔事例〕マーケティングとプロモーション（南信州観光公社を事例に）

☆地域遺産を素材としたｽﾄｰﾘｰとしてのﾊﾟｯｹｰｼﾞ化から商品としてのﾊﾟｯｹｰｼﾞ化へ

時代背景	観光統計（現状）の把握	分析と活用方向
ゆとり・総合学習への転換	県北部に比し認知度が低い危機感	住民とのふれあいで通過から体験・滞在型へ。

↓

・大手旅行社や学校へＤＭ送付するが、反応薄（Ｈ８～）

・初めて自然教室に行った高校から「農家宿泊がしたい」と要望。

↓

民間のノウハウ、攻めのセールス

・旅行会社の営業ﾏﾝの招聘、申込や打合せは旅行社に任せ、地元は商品開発と受入に注力

・複数素材を提案し学校が選び、旅程を作成

理念を持ったプログラム開発

・「感動は人を変える、その感動は本物体験から」「全ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑに地域の人が関わる」

・農家民泊１泊、民間旅館１泊というﾊﾟﾀｰﾝを守る

・棚田農作業、桜守、五平餅調理体験など 180 のﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ。年間 1～2 の新規ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを開発。

・住民との日常会話をﾋﾝﾄに新素材開発につなげる

↓

教育旅行年間５万人／ノウハウを生かし企業旅行も

５　地域遺産を五国（広域）で活かす

〔Point〕

□県域に視点を広げ、複数のストーリーを俯瞰すれば、継続的な新しい発見へと繋がる、兵庫の大きなドラマが見えてくる。

□県内にある著名観光地や温泉、世界的な知名度のある地域遺産などをつなぐ「ゴールデンルート」と、そこから広がる地域遺産街道を浮かび上がらせる。

□文化、自然の多様性を生かした組み合わせの提案と、移動そのものが観光になりうるアクセスの充実で、県内滞在の時間を増やす。

□県域において、地域遺産をマネジメントできる専門人材や地域遺産や地域づくり活動の情報を蓄積・共有する仕組みを構築する。

〔手　法〕

①県域でのドラマを描く

・神話、国宝、人物、自然美、伝統芸能、伝統芸術、産業、ロケ地や作品の舞台などテーマを広げて広域でつなぐ

・全国最多の日本遺産認定地相互の連携など、他にはない兵庫のドラマを見出す

・特定のテーマと、食や癒やし、鑑賞など多様な消費の組み合わせ

・県内各地域での活動の拡大でゴールデンルート拠点間を地域遺産で繋ぐ

②大きな舞台を面として生かす

・文化と自然の多様性を生かし、組み合わせで素材を充実させる

・滞在期間のアレンジを可能にするアクセスの選択性の確保

・移動そのものに観光価値のある移動手段の組み込み（自転車やトレイル、船）

・同一テーマで繋いだ五国間交流を促す遺産周遊ルートの充実化

③情報と人材を広域で環流させる

・分野横断、市町横断のマスター情報としての地域遺産データベースを、遺産の情報だけでなく、活動情報が共有できる仕組みとして構築

・ひょうごヘリテージマネージャー制度の活用等、専門人材を広域で生かすことにより、市町の文化財専門家を補完する広域的な人材活用の仕組みの構築

・兵庫五国の魅力発信とふるさと意識醸成の拠点の整備（兵庫県はじまりの地における兵庫津ミュージアム（仮称）の整備）

・定期的、継続的に地域に関わってくれる外部人材（関係人口）を地域の強みにする

参考：広域で活かすための県の取組み

（広域課題への具体的対策）

総合力発揮に向けた日本遺産等横軸連携
＊アクティビティの共有などの連携
＊“兵庫の日本遺産”のブランド力向上
＊交通アクセス、ルートの検討と改善

（五国の遺産の価値と美しさを伝える）

＊五国の遺産映像の制作､アーカイブづくり
＊兵庫津ミュージアム（仮称）の整備

（行政界をまたいだ情報集約・マップ化）

兵庫地域遺産ＧＩＳデータベース
＊地域遺産をカテゴリごとにマッピング
＊人物や事件などキーワードで関連付け
＊アクセス時間や想定観光客ニーズ分析

【背　景】
・ゴールデンスポーツイヤーズ、大阪・関西万博など交流人口拡大の好機
・リアルタイム映像や仮想映像など遺産を可視化する技術の発達
・滞在型、着地型観光の定着

６　地域遺産を次代につなぐ

〔Point〕

□地域遺産そのものには様々な所有形態があるが、地域共有の資産としてとらえる新たな所有やマネージメントの仕組み（地域所有）の議論が必要である。

□資金調達の手法は多様化しているが、事業の説明力、予算・決算などの説明力、ファイナンス能力が成否の鍵となる。

□子どもが自ら調べ、自ら表現するなど主体的にふるさとの歴史や自然を学ぶ機会を増やすことが重要。大学生など若い世代が企画し、高齢者が語り部となるなど、世代間のふるさとの共有につなげる。

□様々な主体がそれぞれの役割のもと地域遺産と関わる中で、地域づくりの主体性を確立していく。

□大規模災害や少子高齢化によるコミュニティの弱体化など地域遺産の存続のリスクに対して、各主体が日常的な備えを進めることが必要である。

〔手　法〕

①地域共有の資産を外部との連携で生かす

・地域遺産を地域共有の宝として公共で管理維持するためのルールづくり（国レベルでの今後の検討も必要）

・個々の地域遺産だけでなく、町並みや景観全体を議論し、保全するルールづくり

・出資者を地域内外から広く募る、地域運営の中核組織の立ち上げ等、資金を動かし継続的に確保する仕組みづくりと人材の確保

②住民の誇り（シビックプライド）へつなげる

・学校や地域におけるふるさと学習の場においてホンモノを体感・体験する機会を通して子供たちにふるさとへの誇りを育む

・カルタやトランプなどゲームや遊びを通じて地域資源の存在に親しみ、学ぶ

・地域での目標設定や課題の共有の場を設けることにより、自分たちがふるさとをつくり、動かしているという自負心を育み、それを地域の取組の推進力とする

③様々なリスクから地域遺産を守る

・大規模災害に備え、地域における保存体制を確立するとともに歴史的資料保存の基礎的なノウハウの普及啓発に取組む

・コミュニティの変容する時代でも、後世に残すべきものを守るための仕組み

・継続的な映像化、電子媒体化

参考事例

〔事例〕大学との連携による親子参加型イベント「ミキシル」（三木市）

・三木市と神戸芸術工科大学との連携協定の一環として、三木市に残る地域遺産や観光スポットを巡る「三木国パスポートスタンプラリー」「ミキシル CM」など、子ども達が体験しながら故郷を知るための親子参加型イベントを開催。

・新興住宅地の住民は古くからの市街地を訪れたことも無い人も多く、交流のきっかけとなっている。

▲イベントの様子

〔事例〕香美町「ふるさと教育の推進」（香美町）

伝統的な技術や知恵を学び、子どもたちがふるさとを学び学習を行うなど、「ふるさと香美」の自然や文化、人材などについて理解する教育の場を設け、ふるさとへの誇りをもち、自己の夢や志の実現に向かって努力するとともに、ふるさとへの発展を願い、ふるさとを大切にする人づくりを進めている。地域の人・自然・文化の活用を図るデータを共有し、「ふるさとものしり博士」「ふるさと教育応援団」等の地域人材を活用した特別授業を行い、各校区で特色のあるふるさと学習に積極的に取組んでいる。

▲「ふるさと教育応援団」によって編集された「ふるさとガイド」。小学校区ごとに地域に残された遠くの歴史文化をたくさんの人に知ってもらい、活用を通じて地域を再認識、再評価し、将来に継承していくための取組みのきっかけとなることを目的として作成。

〔参考〕長期的な視野に立った地域遺産のマネジメント組織の類型

中間支援型
地元の事業者を育成しながら交流人口を増やす
例：NPO ﾊｯﾄｳ・ｵﾝﾊﾟｸ（別府市）

旅行事業型
旅行業を中心とする

例：（株）南信州開発公社（長野県）

資源開発型
道の駅など磁場産品の販売

例：（株）ﾆｾｺﾘｿﾞｰﾄ観光協会

区分	従来の観光協会など	新たなプラットフォーム
機関決定を行う構成員	観光関連事業者	複合的産業界と地域住民
地方公共団体との関係	行政補完型	パートナーシップ型
サービスの志向	構成員/来訪者/地域住民	顧客志向
事業活動の範囲	行政エリア内	顧客ニーズに応じたエリア
主な業務内容	定期ｲﾍﾞﾝﾄ運営/広報	多角的事業

用　語　説　明

ア行	アイデンティティ	自己が環境や時間の変化にかかわらず、連続する同一のものであること。本指針内では、地域社会への帰属意識や誇り、愛着のこと。
	インバウンド	外国人が日本を訪れてくる旅行のこと。日本へのインバウンドを訪日外国人旅行または訪日旅行と言う。
	ＡＬＴ (外国語指導助手)	外国青年を招致して地方自治体等で任用し、外国語教育の充実と地域の国際交流の推進を図る語学指導等を行う外国青年招致事業（JET プログラム）の職種のひとつ。主に学校、または教育委員会に配属され、日本人外国語担当教員の助手として外国語授業に携わり、教育教材の準備や英語研究会のような課外活動などに従事する。
	大輪田泊	奈良時代に、僧の行基が築いたと伝えられる摂播五泊（河尻・大輪田・名寸隅・韓・室津）のひとつ。平安時代末には平清盛が港の前面に経ヶ島を築造して、風波にも安全な港とした。中世以降は兵庫津と称される。古代から続く瀬戸内航路の重要な港であり、現在の神戸港の原型。
カ行	関係人口	「移住・定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと。地方は人口減少・高齢化により、地域づくりの担い手不足に直面しているが、地域によっては若者を中心に、変化を生み出す人材が入り始めており、「関係人口」と呼ばれる地域外の人材が地域づくりの担い手となることが期待されている。
	旧五国	現在の兵庫県域は、摂津国、播磨国、但馬国、丹波国、淡路国の５つの旧国を中心に構成されている。旧国は律令国家の成立期である７世紀に成立し、地域の歴史の大枠を規定してきた。なお、現在の県域には赤穂市西部の福浦地区(旧備前国)、佐用町北西部の旧石井村地区周辺(旧美作国)も含まれており、詳しくみると７国にまたがることになる。
	神戸事件	慶応４年（1868 年）に現在の三宮神社前(神戸市)において備前藩兵が隊列を横切った外国人水兵らを負傷させ、銃撃戦に発展し、居留地予定地を検分中の欧米諸国公使らに水平射撃を加えた事件で、明治政府最初の外交問題。問題を起こした隊の責任者であった滝善三郎が切腹する事で事件は一応の解決を見た。
	ゴールデンルート（兵庫ゴールデンルート）	東京、箱根、京都、大阪をつなぐコースは日本観光のゴールデンルートと呼ばれており、兵庫においても客足の流れをさらに呼び込もうと、神戸、姫路、城崎（豊岡市）をつなぐ周遊コースを名付けたもの。

サ行	(北摂地域の)里山	里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域のこと。特に兵庫県では日本一の里山と言われる川西市の黒川地区の里山が有名。
	山陰海岸ジオパーク	京都府（京丹後市)、兵庫県（豊岡市・香美町・新温泉町)、鳥取県（岩美町・鳥取市）にまたがる広大なエリアを有し、約 2,500 万年前にさかのぼる日本海形成に関わる火成岩類や地層、日本海の海面変動や地殻変動によって形成されたリアス海岸や砂丘をはじめとする多彩な海岸地形など、貴重な地形・地質遺産を数多く観察できることが特徴。平成 22 年(2010 年)には世界ジオパークネットワークへの加盟が認定された。
	シビックプライド	19 世紀のイギリスの都市で重要視された考え方で、自分自身が都市を構成する一員であると自覚し、都市をよりよい場所にするための取組みに関わろうとする当事者意識を伴う、都市に対する誇りや愛着のこと。
	小規模集落	戸数 50 以下で高齢化率 40%を越える集落のこと。
	初代県庁復元施設及び兵庫津ミュージアム（仮称）	県政 150 周年を契機に、県民が県の成立ちを振り返り、ひょうご五国の歴史・文化・産業を体感・体験しながら学ぶことのできる施設として整備を進めている県立施設。（策定時）
タ行	ため池	全国のため池約 19 万箇所のうち､兵庫県には約 3 万 8 千箇所のため池があり、全国一である。ため池は降水量の少ない瀬戸内海地方などで多く造られており、兵庫県内でも特に南部で多い。
	デカンショ節	かつて城下町として栄えた丹波篠山の地では、江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節によって、地域のその時代ごとの風土や人情、名所、名産品が歌い継がれている。平成 27 年（2015 年）には日本遺産の最初の 18 県の一つとして認定された。
	都市山・六甲	瀬戸内海国立公園の一部に位置し、古来よりこの地域のシンボルとして存在してきた六甲山は、大阪・神戸などの都市圏に隣接していることから、大正期以降は観光地として開発が進んだ。
	トレイル	登山用の遊歩道や、自然散策のコースを指す英単語。森林や原野、里山などにある「歩くための道」のことで、歩きながら風景や益し、文化をじっくり感じ取ることができるのが特徴。

ナ行	日本遺産	平成 27 年度より文化庁が認定を開始。地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援する事業。世界遺産登録や文化財指定は，いずれも登録・指定により文化財の価値付けを行い、保護を担保することを目的とする一方で、日本遺産は既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがある。
	人形浄瑠璃	国生み神話ゆかりの「戎舞」が起源といわれる淡路人形浄瑠璃（国指定重要無形民俗文化財）は、３人遣いの人形、義太夫、太棹三味線で演じられる淡路島を代表する伝統芸能。最盛期の江戸時代中期には 40 以上の人形座があり、全国各地に人形浄瑠璃の魅力を伝えた。
ハ行	パッケージ化	地域に点在する観光資源同士や、観光資源と食・イベント・宿泊地・体験などを組み合わせた旅行体験そのものをひとつの商品と捉えて観光客に提供すること。
	阪神間モダニズム	1900 年代から 1930 年代の日本において、六甲山系と海に囲まれた阪神間を中心とする地域に育まれた近代的な芸術・文化・生活様式とその時代状況を指す。
	プラットフォーム	地域内外の多様な主体が一体となって地域遺産を活かした地域活性化に取り組めるようなしくみのこと。
	文化財保護法改正	2018 年春の国会に「文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律案」が上程・可決され、2019 年 4 月 1 日から施行されることとなった。この法案の趣旨は、「未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取組んでいくことが必要」で、「文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力の強化を図る」ことにある、とされている。
	ひょうごヘリテージマネージャー	阪神淡路大震災の教訓から、1996 年の文化財保護法改正により文化財の裾野を広げる登録文化財制度が創設された県ではその制度を支える人材が必要と考え、2001 年度に教育委員会と建築士会が連携して「兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会」を開講し、以降 2017 年度までに 14 期の講習会が行われている。「地域に眠る歴史的文化遺産を発見し、保存し、活用し、まちづくりに活かす能力を持った人材」と定義されている。

マ行	御食国	古代の淡路は、海人のつくる塩を中心に多くの海の幸を都に提供し、天皇の食膳を司る「御食国」として重要な島であった。古代国家形成期に果たした役割の重要さによって、奈良時代に編纂された『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」の中で、淡路島は最初に生まれた特別な島として描かれることとなった。
ヤ行	UJI ターン	U ターン（進学や就職で大都市圏へ移住した地方出身者が再び出身地に移り住むこと。）、J ターン（地方出身者が出身地には戻らず、出身地に近い都市へ移り住むこと。）、I ターン（出身地とは別の地方、主に大都市圏から地方へ移り住むこと。）の総称

指　針　策　定　の　経　緯

1　検討経緯

平成 29 年　9 月 12 日　平成 29 年度第 1 回地域遺産活用方策検討委員会
（指針の論点、現地調査の実施の検討）

平成 29 年 12 月 21 日　平成 29 年度第 2 回地域遺産活用方策検討委員会
（指針骨子（案）の検討

平成 30 年　3 月 13 日　平成 29 年度第 3 回地域遺産活用方策検討委員会
（指針素案の検討）

平成 30 年　8 月 27 日　平成 30 年度第 1 回地域遺産活用方策検討委員会
（指針案の検討）

2　現地調査

調 査 日　　平成 29 年 10 月 17 日

調 査 先　　■朝来市
神子畑鋳鉄橋、神子畑選鉱場
■養父市
あけのべ自然学校
明延鉱山坑道、社宅跡、一円電車
明延ミュージアム
ギャラリーGOCCO
おおやアート村拠点施設 BIG LABO

内　　容　　・地元活動団体や地元自治体との意見交換
・現地視察

地域遺産活用方策検討委員会委員

区分	氏名	役職
委員	奥村　　弘	神戸大学人文学研究科長兼文学部長（委員長）
	赤澤　宏樹	兵庫県立大学自然環境科学研究所教授
	朝野　泰昌	湯村温泉朝野家社長 新温泉町ジオパークネットワーク副会長
	客野　尚志	関西学院大学総合政策学部教授
	澤田　雅浩	兵庫県立大学減災復興政策研究科准教授
	玉田　恵美	NPO 法人姫路コンベンションサポート理事長
	古田 菜穂子	岐阜県観光国際戦略アドバイザー 山形県海外戦略アドバイザー
	松原　永季	有限会社スタヂオ・カタリスト代表取締役
アドバイザー	角野　幸博	関西学院大学総合政策学部教授
	田辺　眞人	園田学園女子大学名誉教授
	玉岡 かおる	作家、兵庫県教育委員
	中瀬　　勲	人と自然の博物館館長